

対象者の把握については、保健・医療機関及び福祉関係機関・団体などの協力のもとに行われています。

4. サービスの決定

本事業は、申請方式により申請があったご家庭に対し、対象者の身体状況などに応じて市、協会のケースワーカーが訪問調査を行います。そして、そのアセスメントにもとづいてサービスの適否が決定される仕組みになっています。

5. 家庭介助員派遣事業の職員配置

サービス協会発足当時、3名の介助員をもってスタートした本事業も、国のヘルパー増員計画などにもとづいて、現在では9名となっています。（いずれも本会の非常勤職員）

| 事業の実績 | 事業名 | 項目 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 合計 | (表10) | |
|-------|-----------|------|-------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|-------|-------|
| | | | 元年度 | 家庭介助員派遣事業 | 対象者数 | 9人 | 9人 | 11人 | 10人 | 11人 | 11人 | 13人 | 14人 | 17人 | 17人 | | 17人 |
| | | 派遣回数 | 59回 | 49回 | 66回 | 55回 | 63回 | 58回 | 72回 | 77回 | 86回 | 99回 | 89回 | 119回 | 892 | (表11) | |
| | | 派遣時間 | 88.0 | 98.5 | 102.0 | 98.0 | 119.0 | 110.5 | 124.0 | 130.5 | 145.0 | 182.0 | 160.0 | 216.0 | 1,573.5 | | |
| 二年度 | 家庭介助員派遣事業 | 対象者数 | 19人 | 20人 | 20人 | 20人 | 22人 | 18人 | 23人 | 23人 | 22人 | 24人 | 24人 | 23人 | 258 | (表11) | |
| | | 派遣回数 | 105回 | 116回 | 105回 | 120回 | 131回 | 130回 | 143回 | 127回 | 107回 | 125回 | 126回 | 130回 | 1,465 | | (表11) |
| | | 派遣時間 | 192.0 | 207.5 | 194.5 | 221.5 | 243.0 | 229.5 | 259.0 | 229.5 | 201.0 | 237.5 | 224.5 | 244.0 | 2,683.5 | | |

近隣から地域へ。自ら広げた生活範囲

～家事に育児にたくましい精神力を
見せるMさんの場合～

□村上登志枝

Mさん ♀ 29歳
S59年 交通事故により失明
S60年 七沢リハビリテーション病院で生活訓練
S62年 結婚
平成元年 長男出産

派遣決定理由

実母がY市から毎日通ってきて育児・家事などの援助を行っているが、かなりの疲労が蓄積されてきており、その軽減化を図るため。

平成元年6月 初回訪問の印象

- 室内がきちんと整理されている
- 4カ月の乳児を保育している
- 明るく素直な落ちついた人柄
- 部屋に段差はなく、動きやすいようである。こうしたことから本人にハンディを感じさせず、夫や実母の協力の大きさを感じた。

7月

介助員が掃除機をかけはじめると順次部屋を移動するが、身のこなし方のなめらかさに「本当に見えるのだろうか？」と思ったことも度々である。

同月離乳食開始、手探りで子供の口元を探すMさんと、食べたい一心の子供が悪戦苦闘しているが、真剣に取り組むMさんの姿にあえて手を貸すことはしない。

8月

飼い犬にストレスがたまるのか、狂気ともいえる鳴き声の為、子供が寝つけず、寝つくまで犬を散歩

に連れ出す。（業務外の仕事）

9月

子供や犬を散歩につれだす必要上、実母に介助され、本人の散歩も習慣化しはじめているようである。

10月

訪問すると、子供の泣き声が聞こえ、本人も泣いていた様子。子供の急な発熱にどうしてよいのかわからず途方にくれていたようで、実母の到着を待って小児科へ。

子供の初めての病気は子供自身より、Mさん本人にとって精神的負担大であり、加えて同月Mさんの首すじにオデキ様のものができ、検査～手術～予後と6週間ほどかかり、結果的には良性のものだったが、この間の不安感は大きなものであったようである。

11月

Mさん本人や子供の健康のアドバイザーとして協会看護婦を同行して紹介する。同月、朗読ボランティア「ひばりの会」や点訳奉仕ボランティアと関わりをもち、点字用絵本や料理法テープなどを入手。

12月

犬を連れて散歩にしようとする、Mさんから「一緒に散歩に行きたい」との申し出あり。訪問を始めて半年になるが本人から外に出たい旨の申し出は初めてのことである。犬をつれ、子供を背負い、右ヒジにMさんをつかまらせて1時間散歩。

訪問から半年をふりかえって

派遣内容の本来の仕事は掃除、洗濯であるが、ハンディを持つMさん本人への関わり方が大きくなるのは当然のことと思う。家の中、家族の中だけの生活範囲を近隣～地域へと広げ、ハンディにとらわれず、ごく普通の社会生活を営むことのできるよう介助を提供する時、公的派遣では介助内容にかなり制約を受けることも事実である。さらに子供の保育の中心者は常にMさんであってほしいと思う。介助員は保育に関して常に見守る援助を心がけているが、子供の可愛らしさについて手がでてしまいそうになる。

平成2年1月

出産後1年、Mさんの子育てに自信が感じられる。来月、信仰上の仲間と長崎旅行の予定。実母も温泉旅行を計画中。みる方もみられる方も、上手にやりくりして生活をエンジョイする余裕をつくりだしている。

2月

協会へ「買い物に行きたいが…」との電話あり。ワーカーと相談の上、スーパーへ同行。介助員が目となることで、Mさんが商品を手にとって確認、購入決定をし金銭授受も自身で行う。肉親でない介助員がついての買い物は、Mさんにとって一人で社会生活へふみだした一歩のような気がする。

3月

「白杖で散歩に出る」との申し出あり。子供をベビーカーに乗せ、Mさんが犬をひく後ろからついて

歩く。急な方向転換に対処できないなど問題はあるが、畑道を回り一時間少々を歩く。

4月

日常の買い物を自分でしたいとMさんからの希望があり、また通院介助など、外出の機会が増えているので、Mさんとサービス協会との話し合いの結果、Mさん宅の乗用車使用などをもりこんだ契約書を作成し、公的派遣+自由契約サービス派遣の実施にふみきる。

5月

成長スピードの早い乳幼児の保育に日夜追われるのは、どの母親もそうだが歩きはじめた子供の24時間は特にすさまじいものがある。週2日の午前中は介助員が、連日午後から実母が訪問。夫は早い帰宅でMさんを支援、週4日午前のみMさん1人で保育。

6月～7月

散歩に出る道すじの同年齢の子供を持つ母親や、ご老人に挨拶の言葉をかけてから現在は互いの家で昼食を共にしたり、遊んだりしている。近隣の世帯数は少ないが、子供を通しておつきあいの輪が広がっていく。

8月～9月

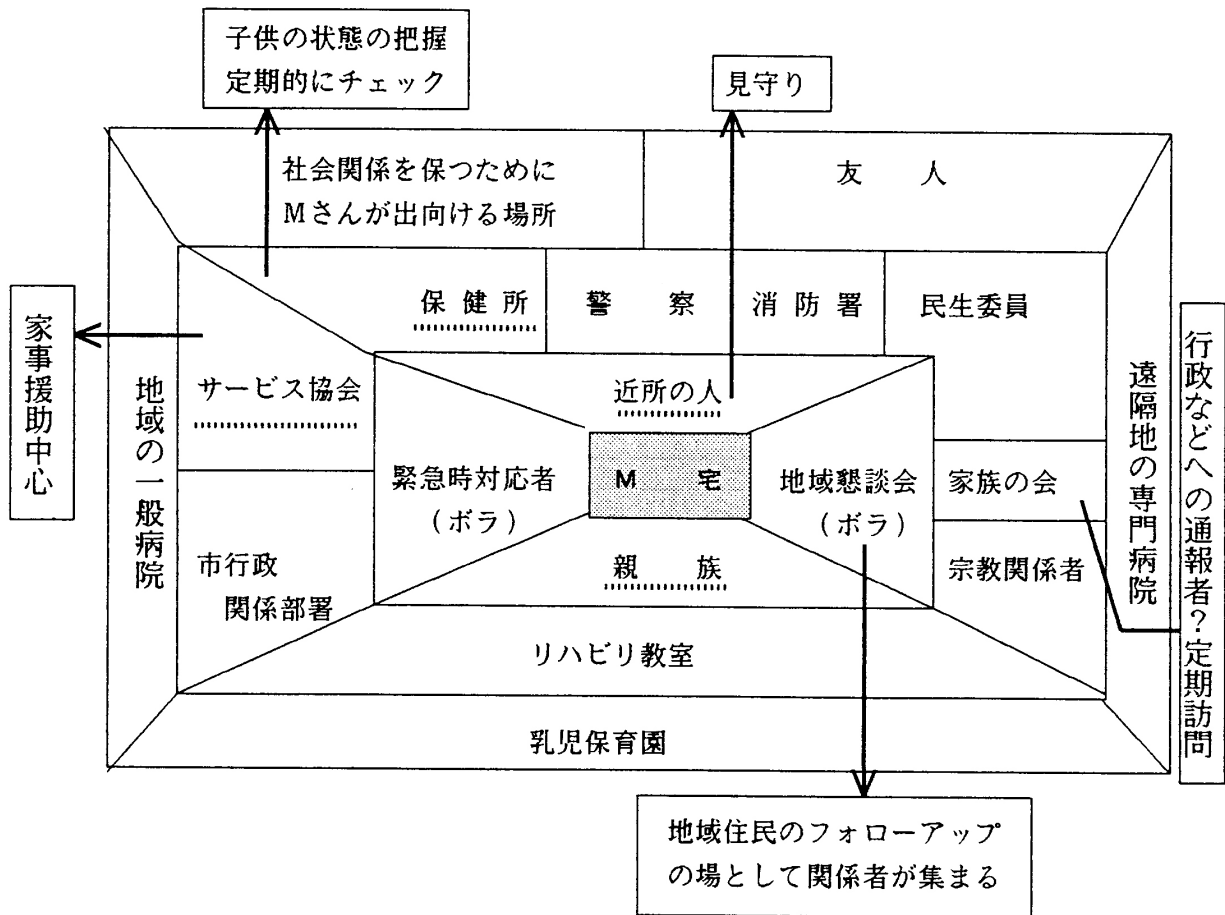
「外出したい」という目的のため、介助員訪問前にMさん本人が掃除、洗濯を済ませていることが多く、外出回数が多くなることで、他人との接触にも慣れ、以前ほど神経質さがない。最近の介助員の仕事は、移動手段と目であり、保育に関してもMさんなりに一本芯の通ったものを持っているのでそれを尊重する。

9月～10月

Mさん歯科医院通院。待っている間、公園で子供を遊ばせる。自宅から離れ、あちこちの公園での外遊びを始める。初めは側にいるだけだったMさんも、スベリ台やブランコ、砂あそびと一緒に遊ぶ。Mさんをとりにくく人は、言葉による表現を多く必要とされるが、Mさんはそれを自分の頭の中で理解し整理しているため、子供の様子など実によく把握している。

訪問当初、私は盲目というハンディを何とか理解しようと、目をつぶって室内を動き回り、洗濯干しをしてみた。しかし、目の見える私には本当には理解できないと思った時、ハンディはハンディとしておいて、Mさん本人とは対等な人間関係を持ちたいと考えた。今後も help (助ける) するのではなく May I help you? という気持ちで訪問したいと思っている。

Mさんのケア計画図



(図-4)

○ 当たり前のこと とができる幸せ

～夫の励ましで回復早めた

Cさんの場合～

□ 俵 みのる

事例紹介

1. 対象者～C 女 77歳
2. 症状～パーキンソン様症状
白内障
3. 家族構成
C◎ ┌ 次男（会社員、同居）
└ 長女（結婚戸塚在住）
夫□（80歳）
4. 家族との関わり
夫が直接の介助者、娘、息子、
よき援助者
5. 生活歴 主婦、短期の就職
6. 日常生活動作
自立～食事 座位、寝返り
介助～入浴 衣類着脱、清拭、
歩行 排泄（オムツ）
7. 心身の状況
有～視力障害、尿意
無～言語、聴力障害、麻痺、
痴呆
8. 近隣との人間関係
Cさんはほとんど外出をせず交流
も少ない。夫は近隣に親しい家
がある様子。老人会活動を行う。市
内に親戚が多い。夫の入院時には
民生委員が協力。
9. 訪問申請の理由とサービス
Cが寝たきりのため、身の回りの
世話と家事援助

ケアの計画と目標と経過

訪問当初のCさんは、ベットに寝
たり起きたりの生活で、清拭や衣類
着脱を全介助していましたが、回を
重ねCさんの状態や気心が分かって

きた頃に、“不親切でやらないので
はなく、できないところを手伝うの
が私たちの仕事である”というこ
とを、理解してもらいました。そして、
清拭などを一緒にしてもらうことに
し、いくつかの計画をたてて実行し
ていきましたが、始めてから数ヶ月
でいろいろな事ができるようになり
ました。

計画と目標

- 1 清拭や衣類の着脱を少しずつ行い
自立をめざす。
- 2 不安定な歩行を助けるために膝の
屈伸運動を行う。
- 3 オムツをしているが尿意はあると
いうので、ポータブルトイレを介
助つきで使用する。

経過

- ・10月末
Cさんの起きている時間を増やすた
め、清拭後に茶の間に移り、座っ
てもらう。
- ・11月中旬
膝の屈伸運動を開始する。
Cさんのできる範囲で衣類の着脱を
開始する。始めてなので私の手をあ
てにしがちだが「手を貸さないでみ
ているほうが辛いのですよ。頑張っ
て下さい」と声をかけできるだけ手
をださずにいる。
- ・12月初旬
Cさん、顔、手、首、腕を自分で拭
く。